

ドクターのヒューマンドキュメント誌

DOCTOR'S MAGAZINE

ドクターズマガジン

5
2018
No.223 May



ドクターの肖像

日本大学医学部
内科学系消化器肝臓内科学分科 教授

後藤田 卓志

Forte —躍進する病院—

医療法人社団 財団法人

熊本機能病院

Precursor —先駆者—

はちのけファミリークリニック 院長

小倉 和也



マイクロサージャリーの全国的なワークショップを年1回行う



外傷を中心に24時間対応する

同院がカバーする医療圏は熊本県北部だが、専門性の高い整形外科や形成外科での高度医療を求めて、県内だけでなく九州全域から患者が訪れる。診療の柱となる整形外科では、上肢班と下肢班に分かれて治療に当たる。グループ分けされていることで症例を集中させ、治療技術の向上を図るのが狙いだ。

下肢班が担当する変形疾患における人工関節治療では、手術に対応できる医師が5人在籍。熊本県内で第1位、

同院がスタートしたのは1981年。熊本赤十字病院の整形外科で、義手・義足や手足の再接着の研究をしていた米満弘之氏(前理事長・現会長)によって、手術とリハビリができる整形外科病院として開設された。折しもマイクロサージャリーが導入され始めた時代、整形外科分野が大きく転換しようとしていた時期に重なる。そうした時代の変化をいち早く読みとり、手術に特化する病院として第一歩を踏み出した。現在、整形外科の年間手術件数は2435件(2016年度)に上っている。

同院がカバーする医療圏は熊本県北部だが、専門性の高い整形外科や形成外科での高度医療を求めて、県内だけでなく九州全域から患者が訪れる。診療の柱となる整形外科では、上肢班と下肢班に分かれて治療に当たる。グループ分けされていることで症例を集中させ、治療技術の向上を図るのが狙いだ。

同院がカバーする医療圏は熊本県北部だが、専門性の高い整形外科や形成外科での高度医療を求めて、県内だけでなく九州全域から患者が訪れる。診療の柱となる整形外科では、上肢班と下肢班に分かれて治療に当たる。グループ分けされていることで症例を集中させ、治療技術の向上を図るのが狙いだ。

手術とリハビリの二本柱 年間2000超の手術症例数

捉えて取り組んでいます。「Social Inclusion」という病院の理念が地域にも浸透しています」

さらに手術と同じように重視したのがリハビリテーション。マイクロサージャリーによる手や指の治療では術後のリハビリが重要な役割を果たすが、当時はまだリハビリそのものの概念は浸透していなかった。米満前理事長は、日本で初めて公的なリハビリセンターを開設した湯之見病院での治療経験を活かし、手術と並んでリハビリ治療力を入れる病院を目指した。

九州でもトップクラスの症例数を誇る。人工関節手術を得意とする佐賀大学との連携も緊密だ。手術室を8部屋設置し、5人の麻酔科医が常勤するなど、手術部門の整備が豊富な治療実績につながっている。また、人工関節手術の質を向上させるため、熊本県内で初となる人工関節置換術のナビゲーションシステムを導入した。

マイクロサージャリーで 全国でも少ないWS開催

急性期治療後の患者を中心とした術前から始める機能回復のためのリハビリだけでなく、同院が注目したのは高齢者に向けたQOLを維持するためのリハビリだ。

急性期治療後の患者を中心とした術前から始める機能回復のためのリハビリだけでなく、同院が注目したのは高齢者に向けたQOLを維持するためのリハビリだ。

急性期治療後の患者を中心とした術前から始める機能回復のためのリハビリだけでなく、同院が注目したのは高齢者に向けたQOLを維持するためのリハビリだ。

Forte

躍進する病院

Social inclusionを追求 地域に応える「ケア・ミックス病院」

医療法人社団 寿量会 熊本機能病院



整形外科手術とリハビリテーションを専門に開設された熊本機能病院。病院の理念として掲げるのは、「Social inclusion(社会的包摂)の構築」と「QOLとノーマライゼーションの実現」である。この理念の下、地域住民のニーズに応えながら、救急医療や循環器治療、高度な手術に対応する形成外科治療など、診療の幅を広げていった。父の代からの病院を引き継ぎ、救急医として日々診療にも携わっている理事長の米満弘一郎氏に、同院の果たす役割や今後の展望について伺った。



一般開放されている「地域交流館」(写真上)と新棟の総合受付(写真下)

熊本地震では避難場所として 住民1500人が身を寄せた

熊本市の中心部から北へ車で20分ほどの場所にある熊本機能病院。九州を貫く国道3号線に近い新興住宅地にある。病院の正面玄関に入ると、すぐあるのは、レストラン、喫茶店と書店、その奥にはイベントを行う多目的ホール。これらは「地域交流館」として、一般住民にも開放されている。総合受付は廊下を通って奥にある。

一昨年の熊本地震では、避難所に指定されていないにもかかわらず、約1500人の地域住民が地域交流館に避難してきたという。

「井戸の水を使っていたのと、台風災害の教訓から自家発電の設備も備えていたので、トイレは通常通りに使えました。避難してきた住民の方たちに、職員が当たり前のように対応していたことがうれしかったですね」

そう語るのは理事長の米満弘一郎氏だ。設立当時から理念に掲げ実践しているのが、「Social inclusionの構築」である。

「ハンデがある方など社会的弱者を社会全体で受け入れて、助け合っていくこととするものです。機能改善など医療にだけ焦点を当てるのではなく、介護や地域にもつながるような広い範囲で

Point

毎朝、医師全員参加のカンファ
海外留学も積極的に支援



診療科の垣根を越えた連携のため、45人の医師が全員参加する早朝カンファレンスは、先代が理事長の時から平日に毎日行われている。8時半からスタートし、全員が3分間スピーチするのが習慣となっている。

「今日はあの先生がいないとか、病気しているとか分かりますし、患者さんの話もできます」(米満理事長)

科目ごとのカンファレンスではなく、医師全員で情報を共有することで自ずとチームワークは良くなったという。新任の医師もすぐに病院になじめるメリットがあるという。

また、世界標準の技術を習得するため、希望する医師にはメイヨークリニックなどの海外留学を積極的に支援している。先進的な手術法を学び、手技を身に付けた医師たちによって、常にレベルの高い医療が保たれている。



充実したりハビリ施設とスタッフ

病院の理念に基づいた手厚いリハビリ体制は特徴的だ。131床の回復期リハビリテーション病棟は県内で一番多い。主治医である各診療科の医師とリハビリチームのスタッフが連携を取りながら、術前からリハビリを開始する。

リハビリを科学的に分析し
治療効果の向上に貢献

きっかけで、その後同院で研修を受ける医師も多いという。都市部では少ない農業外傷など、手の治療ができる教育施設として、関東圏からも研修を希望する医師が集まる。

サポートするのは11人のリハビリ専門の医師と、180人以上のPT、ST、OTといった専門スタッフたちである。病院内で手術からリハビリまでスムーズに進むことが、回復に大きな影響を及ぼしている。

また、1100㎡の広さを誇るリハビリ施設も充実しており、開放感あふれる高い天井の下ではつらつとリハビリに励む患者の姿も目を引く。

また、同院は質的評価への対応にも積極的だ。中でも神経内科・リハビリテーション部長の徳永誠氏は、臨床の傍ら、「熊本脳卒中地域連携ネットワーク研究会」で、リハビリの質を長年研究しており、多数の論文を発表し、成果を上げている。

その一つである補正FIM[※]（Corrected FIM）の研究。脳卒中患者に対するリハビリによる改善指標となるFIM利得が入院時FIMの数値に依存することに着目し、依存しないための補正方法を導き出した。その結果、医療機関同士の比較ができるようになった。

こういったリハビリの質的評価を進めていくことで、PT、ST、OTの質を上げ、さらにリハビリの治療効果に反映することも分かり、同院ではスタッフの教育に力を入れ、さらなるリハビリ技術の向上に取り組んでいる。

運営する訪問看護ステーションや介護老人保健施設とも連携をとり、スムーズな救急患者の受け入れが実現している。

地域住民の署名嘆願を受けて開設されたのが循環器内科。高齢者に多い循環器疾患や生活習慣病の診療が求められてのことだった。さらに日本人に多いとされる冠動脈性狭心症研究の第一人者である泰江弘文氏によって、熊本加齢医学研究所を立ち上げた。現在でも狭心症や心筋梗塞などの研究が続いている。2018年には日本循環器学会の医学雑誌「Circulation Journal」で、最優秀論文賞を受賞。民間病院としては快挙である。

形成外科では、それまで治療できる病院がほとんどなかった小児の先天奇形の診療に力を入れ、「国際唇裂口蓋裂センター」を開設。特に口唇・口蓋裂の手術件数は全国3位の実績を誇り、国内だけでなく東南アジアからも患者が訪れる。形成外科医、矯正歯科医、STらでチームを結成し、これまで診療した唇裂口蓋裂の患者は1000人以上に上る。小児の多指症や合指症などの先天性の形状異常疾患の手術も数多く行っている。

また、リハビリ治療に付随して神経内科の需要が高まったため、パーキンソン病などの神経難病の治療を行う病棟

DATA

医療法人社団 寿量会
熊本機能病院

〒860-8518
熊本県熊本市北区山室6-8-1

- 開設：1981年
- 理事長：米満弘一郎
- 院長：中島英親

- 診療科目：整形外科、リウマチ科、形成外科、小児形成外科、神経内科、リハビリテーション科、脳神経外科、循環器内科、血管外科、内科、放射線科、救急科、外科、皮膚科、麻酔科
- 病床数：395床（一般176、回復期リハ131、地域包括ケア55、障害者施設等入院33）
- 外来患者数：404人/日（2016年度）
- 入院患者数：390人/日（2016年度）



理事長の米満弘一郎氏

地域の要望で救急センターや
循環器内科を開設

整形外科とリハビリを専門とする病院だが、地域住民のニーズに応える形で診療の幅は広がっている。

米満氏の専門である救急医療の分野では、地域の救急患者に対応するため、2012年に救急科を開設。救急外来で対応していた時と比べると救急車の搬送件数は約1.5倍となり、2016年度には延べ1442台、ドクターヘリも5件受け入れられている。

搬送される患者の6割が外傷などの整形外科疾患だが、「これからは在宅医療や地域包括ケアの中での地域支援型の救急医療も目指していきたい」と米満氏は決意を語る。リハビリの状況や生活環境を把握している病院で救急対応できることは、患者や家族の安心にもつながり、同院を指定して搬送されてくる患者も多いという。同法人が棟を設けて治療を開始した。

「診療科は増えましたが、いわゆる総合病院を目指しているわけではありません。せん。私たちが目指しているのは、『QOLとノーマライゼーションの実現』です。失った機能を回復し、社会に戻っていただくために自分たちができる診療をしっかり提供していきたいですね」

※FIM (Functional Independence Measure=機能的自立度評価法)：米国でGrangerらによって開発されたADL評価法。FIM利得は退院時FIMから入院時FIMを引いた数値